**婚礼と礼服のたとえ 2017 10 15**

**マタイ 22:1-14 牧師 安達均**

主の恵みと平安が皆様の心の中に染み渡りますように！

アディアフォラという言葉を聴いたことがあるだろうか？　もともとはギリシャ語の言葉で、その意味は、そのことによって特に変わらないこと。善でも、悪でもなく、命じられてもおらず、禁じられてもいないこと。キリスト教においてこの言葉は、重要な意味を持っている。

特にルーテル教会において、15世紀以降のマルチンルターの司祭としての考え方に、またキリスト教の礼拝形式をどう引き継いで行くかにも大きな影響を及ぼした概念ともいえる。説教の冒頭にひとつの例を挙げたいと思う。

 オルガンという楽器はドイツのビアホールで演奏するのに使われていた楽器だったらしい。礼拝の進め方や音楽においては、変更することに抑制的だったカトリック教会では、ビアホールで使われる楽器が礼拝に使われるなどということは想像もできないことだったと思われる。

しかし、マルティンルターは、オルガンを礼拝の奏楽に使ってみてはどうかという考えついたそうだ。そして、ルターはアディオフォラの概念から、聖書のなかには、賛美歌を演奏する礼拝において、そもそも楽器を使ってはいけないなどとどこにも書いていない。そこで、オルガンが礼拝に使われるようになったという。

アディオフォラの話はひとまず横に置き、与えられた福音書箇所の内容に入っていきたい。　かなりむずかしいというか考えさせられる聖書箇所といえる。一度読んで、イエス様がおっしゃりたいことはこういうことなのだとわかってくるより、むしろ質問ばかりが出てきてしまうような箇所だと思う。

たとえ話であるので、王が父なる神で、王子が御子イエス、家来たちとは預言者たちのことではないかと思う。また最初に婚宴に招かれた人々とはイスラエルの人々、特にユダヤのリーダたち、後から招かれた人々は、ユダヤ人一般市民であり、また異邦人も含んでいたのだと思う。

その婚宴に招かれた人々の中には、家来たち、つまり預言者たちを殺してしまう人々がいる。事実、旧約聖書時代にあって、殺されてしまった預言者はいた。　その殺人者たちに対して、王は怒って軍隊を送って、町を滅亡させると書いてある。　婚宴のたとえ話は、ルカ福音書の14章にも書いてあったのだが、マタイのような殺し合いになってしまうエピソードは書かれていなかった。

皆さんマタイの残した記述を見てどう思われただろうか？　やられたからといってやりかえすという話は、イエスの教えとはいえない。　マタイがイエスのたとえ話をこのような形で伝えているのは、マタイが福音書を著したときの時代背景があるのかと思う。マタイが福音書を著したときはすでに70年のエルサレム陥落が起こっていた。つまり、現実に起こったエルサレム陥落を、マタイは福音書の中で織り込んでいるような面があるのかと思う。

かといって今日の福音書箇所をよく理解できるという話ではない。もっと大きな疑問をいだきたくなる箇所がある。婚宴には、罪人も悪人も招かれて、婚宴会場はいっぱいになる。しかし、礼服を着ていなかった者に、王が近づいていき、側近たちによりほうりだされてしまう話が出てくる。

いろいろな理由から礼服を用意できない人々も含めて、すべての人々を招いておきながら、礼服を着ていなかった理由で、放り出されてしまうのは、どうかと思う。　いったい、イエスは何をこのたとえ話で伝えたいのだろうか。

礼服を着ていないということはどういうことなのだろうか。私たち、とくにカリフォルニアのような自由な地域に住んでしまっていると、礼服を着るか着ないかは、冒頭にお話したような、アディアフォラ、善でも悪でもなく、命じられているわけでもなく、禁じられているわけでもないものではないかと思ってしまう。

しかし、そのような考え方は、1世紀の状況をよく理解していない、現代的な考え方に基づいているのではないかと思う。　つまり、イエスは婚宴で礼服を着るか着ないかということを、イエスが決定的に命じていたことにたとえているのではないかと思えてくる。

1世紀であろうが21世紀であろうが時代に関係なく、イエスがもっとも大切なこととして命じたいたことで、今もそれをもっとも大切な事とすべきことは何だったのだろうか？

神は良い麦も悪い麦もいっしょに育ててくださる。悪人にも善人にも関係なく、太陽を昇らせ、また雨を降らせてくださるのだが、御子イエスを通して、もっともな大切な掟を守るように教えてくださった。

そのもっとも大切な掟とは、主なる神を愛し、また互いに愛し合うように。礼服を着るとは、イエスの思いを身にまとって、父なる神を愛するのはもちろんのこと、罪びとをも、主に創造された命であることを覚えて愛して生きることをおっしゃっているように思える。

そして、礼服を着ていないものがつまみ出されるということは、だれだれさんは宴会に残るが私は宴会上から出されてしまうという短絡的なことではないのだと思っている。数週間前にも話したが、私たちは聖人であり罪びとであるという実際がある。

私たちがイエスの婚宴に集うとき、つまりわたしたちがイエスのもとに集うとき、私たちは罪をも持ち込んでしまうのである。しかし、礼拝において、私たちの罪の部分、主を愛することができないあるいは隣人を愛することができない気持ちが、主なる神によって取り除かれてくるのではないかという希望を私が持っている。礼服を着ていない者がつまみ出されるというのは、私たちの罪の部分がとり除かれるという福音が聞こえてくる。マタイが伝えてくれたこの良きすばらしい福音を喜んで、あらたな一週間のエネルギーとなりますように。　アーメン